

[16] Crossover

<https://doi.org/10.15017/19352>

出版情報 : Crossover. 16, pp.1-25, 2003-12. 九州大学大学院比較社会文化学府
バージョン :
権利関係 :



2002年－2003年 中国山東大学留学記

徳 留 大 輔

(日本社会文化専攻)

2002年9月から2003年7月まで、中国山東省済南市に所在する山東大学歴史学院考古系に中国政府奨学金高級進修生として留学した。留学の目的は、各地の大学や考古学研究所の研究者と研究に関する意見交換を行うこと、現地にて考古学的見地からの資料調査を行うことは当然として、現在の生きた中国を感じてくることでもあった。

この目的を達成するためには、その手段としての中国語会話の能力を上達させることが必須であった。そこで留学当初、特に最初の3ヶ月は中国語の学習に励んだ。午前中は大学で外国人用に準備されている中国語の講義に参加し、午後からは山東大学で日本語を学習している中国人の学生と相互学習を行った。それは、最初の1時間は私が相手に日本語を、その後1時間は私が相手から中国語を学ぶという方法である。「学習」といえばもっともらしく聞こえるが、日本語・中国語で主に日常会話を行うものである。その「学習」の内容とは、例えば現代中国における社会制度の問題点から、日中の歴史観、現在の流行、若者が描く理想の将来像さらには結婚・恋愛観など、お堅いモノから軽いノリで話せるものまで多岐にわたった。そのため、半日もの間「学習」を行うことも少なくなかった。もちろん中国語の講義で学ぶところも多かったが、私と同世代の中国の若者と日々コミュニケーションを行うことで、多くの知見を得ることができたうえに、多くの友人を作ることができ、さらには日常中国語会話の上達にもつながったと自負している。

なお、蛇足であるが、現代の中国の若者が抱えている不安とは、一人っ子政策の産物である、少子高齢化社会対策であるということであった。さて、留学から3ヶ月経って、語学の不安が解消されると、そろそろ留学当初の目的を果たすべく、考古学に関する調査を中国各地で開始した。中国は国土が広く、調査を行うための移動は、日本と比べると大変なものであった。調査地が地方の田舎などになると、夜行電車や夜行バスを乗り継ぎ、やっとの思いでたどりつくということも少なくない。もっとも、そういった苦労を現地の先生方も気遣ってくださり、資料調査の際には、多くの

ご配慮を戴いたものである。

また、山東大学の発掘実習に参加させてもらう機会もあった。日本の大学の発掘実習は夏休みなどを利用して2週間程行うのが一般的であるが、中国の大学の場合はその期間が3～4ヶ月と大変長期間にわたる。また、農村で発掘する場合は、現地の農家を借り切って、そこで寝泊まりし、農家のお父さんが食事の準備をしてくれるという形式であり、大凡日本とは異なるものである。この実習に私も2ヶ月間参加した。なお、発掘に参加した時期は折しも新型肺炎(SARS)が流行していた時期で、感染者がいなければ人の往来が少ない農村の方が都会にいるよりも安全だった。

さて、発掘中は、日本と中国における調査手法の違いや研究における方法論の違いなど議論することも当然あった。しかし、なによりも、ほとんどの現地の人にとって、私は初めて見る外国人であり、特に発掘開始早々は、日本文化の紹介などに追われる日々であったように思われる。その一方で現在の中国で改革開放路線に伴う欧米的な生活スタイルとは異なる、牧歌的な伝統的中国的な農村の生活を垣間見ることができた。

わずか1年間足らずの留学期間ではあったが、考古学に関する成果はもちろんのこと、都会と農村で生活し、現地の方々と交流を深めることができた。そして現代中国における都市と農村の生活の違い、およびそこから発生する思想、価値観の違いというものを十分に肌で感じることができた有意義な留学生活であった。



右から2人目が筆者

伝統とアクチュアリティ、外国人留学生としての個人的体験

三 吉 野 滋 樹

(国際社会文化専攻)

昨日(11月4日)、九州大学体育祭の一環で行われた学内ピンポン大会に教官・院生チームで参加した折、一緒に卓球をやらせていただいている太田好信先生から、本誌上で私の「海外レポート」の掲載が決定したとの話を受けた。予期していないことで驚いた。この10月中旬まで3年ほどフランスに留学していたが、留学後半は生活もおいおい日常化し、研究のための図書館・自宅での仕事が主になっていたのも、関心を惹いてもらえるようなまとまったレポートができるだろうか。もちろん、研究のこと、とりわけソルボンヌに提出を予定している博士論文のことはあるけれど、それは完成してからあらためて振り返りたいところだし……。というわけで、特定のトピックに絞って海外最新情報をレポートするというよりは、フランス滞在の経緯を紹介しつつ、いくつかのエピソードを報告させていただければと思う。

私の研究ベースはフランス文学で、特にボードレーを中心とした19世紀以降のフランス詩・思想を専門として掲げている。研究上フランス留学は不可欠であり、2000年秋にロータリー財団奨学生としてフランス・ナントに留学しDEA(博士論文準備)課程に登録した。

ナント大学では、フランス近代詩研究の泰斗として知られ、自身詩人でもあるステンメッツ教授が教鞭を取っておられる。ステンメッツは伝記・校訂版の出版といった手堅い研究を行う傍ら、その本領は、19世紀後半におけるフランスの詩的言語の変容を独自の展望で捉え直そうとするスケールの大きさにあるだろう。現代の思想的知見をドグマにならない形で援用しつつ、文献学的なデータに目を配りながら、言葉に即した思考をしなやかにたどっていくスタイルは、かねてからの私の関心とも非常に近いものだった。親切な方で、食事に誘ってくださり「どんな視点で論文を書こうと思っているのか」と尋ねられ、覚束ないやり方で答えると「よし、それならば明日の授業でその視点からテキストを2、3取り上げて分析してみよう」と言って講義してくださる。銀髪長身の老ダンディという趣の人なのだが、たとえば「最近、『忘却の誘惑』というボードレーールについての本が出ましたよね」と私が言

うと「君ね、忘却もいいけどね、ぼくは「忘却の忘却」というのを考えてて、それはもっと面白いんだよ」「はあ」と、ステンメッツ先生、ここでまた一席……。こんなふうに独特の雰囲気、魅力を持った方である。しかしこれらはほんとうに貴重な時間であった。

フランスで勉強していて印象的なことは、良くも悪くも、文化的・知的伝統が一定の厚みをもって持続していると感じられること。例えば、試験で小論文が重視されるのだが、発想の独創性より、ラテン以来の修辞学(雄弁術)の伝統的形式に基づいて論が立てられるかどうか問われる。とってそんなに複雑なことではなく、短い小論文でも3部構成をつくり、相手を想定して「明晰に」説得していく形式である。留学前にその訓練はしていたが、なんだか無理な鋳型のような気がして馴染めなかった。しかしフランスでやっていると、権威主義的な鋳型という面もあるのだが、むしろそれは「言葉に即して思考を立てていく」のを助ける柔軟な道具なのだと実感できた所がある。また生活面でも、議論好きのフランス人という紋切型は、やはりそうだなと思うところもあって(嫌味に相手をやり込める、という日本のフランス系知識人が模倣するイメージとは違うと思ったが)、言葉を論理的にたてることによって現実を変えていこうとする苛烈な爽快さのようなものがある。それはそれで疲れもし、不要な矛盾が露呈することもあるのだけれど、言葉を立てれば自分の責任で状況を変えていけるのは、私には開放感があった。

成り行きでフランスに留学することになってしまって、フランス文化にとくにシンパシーがあるわけでも、ましてやフランスに憧れなんてものもなかったのだが(今もないけれど)、外国人留学生の気楽さもあって、留学初年度は気分よく過ごしたものだ。西欧の文化的伝統の深みというのはあるのだと、その上っ面を眺めることはできたかもしれない。ただ、外国の話や話を聴いたりしたりするとしばしば思うが、「フランス」とか、「西欧」とか「日本」とか、一般的にまとめる言い方に居心地の悪さがある。個人的な話をして仕様がなないが、正直なところ、むしろ私個人として、どこで

あれ新しい環境で違う世界を広げていく、それができることへの信頼を取り戻せたのが良かったと思っている。

1年目のナントでは授業も忙しく論文締切も1年で、なるべく毎日ひとつ以上は研究以外の活動をやっていたせいもあり、日本でのように社会・文化などのアクチュアルな情報処理に奔走するということとはなかった。よくいうとマイペースだったのだろうが、地方とパリの差異もあるだろう。フランスでも、昨年の大統領選・総選挙ともに右派が圧勝し、地方分権をはじめとする新自由主義改革が大規模にはじまっているが、特に情報面でのパリ集中はまだ歴然としている。

DEA取得後、留学2年目からパリに移ってソルボンヌ大学の博士課程に登録したが、パリはさすがに情報乱れ飛ぶ大都市である。とはいえ「日本のフランス文化受容」も曲がり角に来て久しい。昨日太田先生も言われていたけれど、サルトル、というと70年代前後には日本でも人文書院版の翻訳が飛ぶように売れていたそう。しかしフランス文化「最先端」が重要だった時代とは今は違う。流行に振り回されないですむのはありがたいけれど、前衛の熱狂に身をさらすのも面白かったかもしれない。ただフランスの知識人は、いまだにずいぶん古典的な「知識人」の像を演じているようだ。昨年から今年にかけて「新反動」論争というのがあって論壇の話題を集めたり、イラク戦争のときは、哲学者のデリダやボードリヤールがシンポジウムを開いて批判したり・・・。

特に近年のフランス現代哲学は、アクチュアルな政治との関わりにおいて論じられることが多い（もちろん古典的な哲学史の伝統も強固だが）。デリダは、毎年の授業でも、常に政治と哲学が交差してくるポイントで語っている。「主権（至高性）」と「動物性」の観念を軸に、ロビンソン・クルーソーとハイデガーの再読を試みた昨年度の授業でも、国家と暴力の問題、「死刑」「葬儀」をめぐる問題、孤独と群集（マルチュード）の問題・・・。フロイトの「死んでいないと思っている死んだ父」の夢や「生きたままの埋葬の幻想」というブランショの主題をあげて、死をもたらす暴力・国家の暴力に基づく論理を、上のような死をめぐる幻想に拠って批判する——「論理」そのものがそういう幻想に基づいているのではないかという観点から批判する——デリダの授業は、「暴力は死においてひとを挫折させる。また暴力を挫折させるものも死である。しかし、死ぬこととは可能なのか？誰が本当に死ぬことができるのか——超-暴力を挫折させる

ことができるために？」という謎めいた問いかけに終わった。とても難しくて、フランス語についていくだけでも大変だが、文献学的厳密さとアクチュアルな思考が結びついた議論の展開は、やはり圧巻というしかない。イラク開戦後の授業ではデリダ先生、前の晩に悪夢を見たという。終戦後の戦犯裁判でフセイン、ブッシュ、ブレア、シラクといった人物を前に、不可能な訴追をしなければならない判事の立場を引き受けさせられていたというのだ。

とはいえデリダといっても知識人の中で主導的な立場にあるわけではない。そういう論壇地図を良く表していたのが、ランダンベールという若手学者の本をきっかけに、左派と見られがちなフランス知識人のエリート意識や差別意識、保守回帰の肯定が暴露された「新反動」論争だった。これは、反進歩派の観点からニヒリズムの系譜を見直す興味深い面もあるけれど、フュマロリやローザンヴァロンといったコレージュ・ド・フランスの学者の正統派意識をめぐる潜在的対立を背景に持っていたり、パリ知識人内部の狭い内輪話という感も否めない。「最新情報」を世界に発信できなくなったフランス知識人の悪あがきという気もするこうした論争より、昨年の大統領選で極右のル・ペンが決選投票に残った晩、TVを見て自然発生的に移民労働者や学生がパリの街路に降りていって、ル・ペン批判の大デモになったときの雰囲気は忘れられない（もっとも、その一週間後のデモのときは、地下鉄の大混雑のせいで友人との待ち合わせ場所まで辿り着けなかったが）。メディア時代におけるデモのフェスティバル化現象？しかし私はフランスにおける革命（とは言わずとも、アクチュアルな現実に即しての政治参加）の系譜も同時に感じてしまった。そう思って通りに出て行った外国人留学生としての私は軽薄なのだろうか、十分に覚めていないのだろうか。

予想通り、個人的な、まとまりのないレポートになってしまったことを最後にお詫びします。また、留学中日本で事務上の手助けをしてくださった院生の下條さん、稗島君、1年の留学を3年に延ばしたにもかかわらず日本から変わらないご指導をいただいた指導教官の阿尾先生、嶋田先生、西野先生に深く感謝します。それにももちろん、卓球仲間として私を待っていてくださった根井先生、太田先生にも。

そして、私の今後の展開に関しては、アルジェリア出身の友人がよく言っていた次の言葉の通りでしょうか——インシャーラー。（2003年11月5日記）

学芸員になりたかった私

瀬川 智子

(日本社会文化専攻)

「そんな作業はアメリカで評価されません。」という言葉聞いたのは、私が古文書を清書し、目録を作っていた時でした。口にしたアメリカ人研究者は、私達と日々通い詰めで資料に向かっていたのだから、自分たちの作業内容が悪いのではなく、資料を整理する作業自体を指して言ったことは明らかでした。資料を整理していく学芸員をめざしていた自分は、動揺した。

比文在学中に、学芸員として司馬遼太郎記念財団に勤めることになって今年で3年目になります。司馬遼太郎先生に関する資料の散逸を防ぐ目的で建設された司馬遼太郎記念館（以下、記念館）も、この11月で開館2周年を迎えます。開館に伴う作業をいろいろやってきました。なるほど、学芸員のする作業はたくさんあるけれど、核になるのはやはり資料を整理し、データベースをつくるということと、館に来ていただけるよう展示会など事業の宣伝に努めることだと、体感する日々です。

私が、学芸員をめざそうと考えたのは、大学への進学を決めたときです。研究だけではなく、皆に開かれた知的空間である博物館に勤務する学芸員は、人の役にたつことができそうだったからです。その為にどうしたらよいかと将来を考えていきました。不況に入っていた頃で、漠然と研究したり、遊びまわったりという大学生活を送るつもりはありませんでした。

学部は社会学を専攻、そこで学芸員の資格をとって、大学院で歴史に籍をおいたのも、学芸員は院卒か、博物館勤務経験が採用の条件と先輩から聞いたからです。かわった進路選択だと言われたこともあります。学部では社会の捉え方に対する教養を身につけて、大学院で専門を深め、実績を得られればと考えていました。

そんなときに、若者の知的探求心を支援する司馬遼太郎フェローシップをうけたことも大きかったです。司馬遼太郎フェローシップでは、インスピレーションが司馬作品であれば、あとは自分で研究等企画テーマを決めることができます。企画を提出できる年齢の制限はありますが、比文のみなさんの中には、日頃からあたためているテーマがあるのではないのでしょうか。この私に、フェローシップという資金援助がついたお

かげで、自分が永年調べてみたかったことと、卒論研究の両方が出来、毎日毎日が楽しくて仕方ありませんでした。

私の研究に関わる上で手放せない資料の目録に出会ったのもその企画実行、研究の日々のなかです。その目録は、図書館受付の隣においてあって、ぼろぼろになっている。（学芸員になって、私もみんなに活用してもらえる資料の目録を作れたらいいな。）とその前を通る度に感じたものです。

フェローシップでは、一人の画家の一生を微細にいかけ、卒論と修論では、高知に数千人いた武士の戦歴とその家族形態の計量分析をしました。比文での1年目を、高知の博物館で学芸員補助の仕事するために休学、その時期にテレビ時代劇の制作補助をするようになったのも今思えば、運がよかったと同時に、学芸員になるためなら何でもやってやろうという気持ちがあったからだと思います。

そのころ、司馬遼太郎記念財団で、記念館を建設するにあたり学芸員を探していると聞き、ダメでもともと申し込んでみました。先生ご自身の蔵書目録を作っていくということを聞いて、自分の専門が生かせるのではないかと、考えたのです。

ところで、学芸員になるにはどうすればよいか。歴史の浅い私にも、しばしば問われた質問です。残念ながら、私はその質問に答えることができません。学芸員の採用には、博物館それぞれに事情が異なると思われるからです。ただ、学芸員になるためにしておいたほうがよいことは、あると思います。

一つには、パソコンを中心とする、デジタルな道具の基本を身につけておくことです。例えば、ホームページは、手元にパソコンと通信回線さえあれば、24時間いつでもダイレクトに宣伝できるので、今や博物館の広報に欠かせない手段の一つとなっています。しかもここ数年の間に環境が改善され、容量の大きい画像もスムーズにみることができるようになりました。しかし、全て業者に頼ると、日付などのテキスト、写真などの画像の変更程度でも安くない費用を払わねばなりません。その結果、従来の広報とコストもかわらず、更新頻度

も低くなりがちです。私は、大学でも、大学院でも情報処理の演習に参加し、インターネットとhtmlファイルの作成と、異なるOSの操作を一通り覚えましたが、それらは本当に役に立っています。

「汎用性の高い資料目録をいかにつくるか」という目的を実現するためにも、コンピュータに通じた学芸員が、効率的にみんなが使えるようなデータベースを作ることが求められます。コンピュータに対応出来ない文字もまだまだたくさんあり、冊子にした目録やリストをつくる意義も大切です。しかし、データベースにしても、展示会のキャプションにしても、コンピュータでつくと変更、追加がすぐできます。記念館では、実際ポスターやキャプションなども自分たちで作っています。博物館では展示や広報でいろんな印刷物を使います。プリンタも高性能で廉価なものがオフィスに備えられることが可能になった今日、学芸員をめざすなら、教養の一つだと思ってパソコンやプリンタ、デジタルカメラの基本操作を知っておいたほうがよいと思います。

学芸員になるためにしておいたほうがいいこと、もう一つはデータベースの作成を必要とするような資料整理をする研究を深めることかと思います。資料を整理すること、それは図書館や博物館の根本作業です。資料は、収集、収蔵だけでなく、整理して意味をもちます。整理がなければ、貸し出しや展示会の企画、立案はできませんし、整理がなければ保存対策をとったり、これからの資料を収集したりすることもできません。博物館では、現場で原資料を整理していくのですから、あいまいな分類の知識では、その資料は、この館にとってどう分類したほうがいいのかという判断に悩みつづけることになります。それ自体は研究にならないからこそ、大学にいる間に資料整理にかかわることは大切だと思います。学芸員になると、資料整理の他にもやることはたくさんあって、それらに費やす時間は絶対的に短くなります。

今、私は司馬家に保存されている蔵書の日録づくりに励む日々です。今後、愛読者であろうとなかろうと、司馬遼太郎先生が著した小説やエッセイ、そして先生が考えたテーマを知らずに、この国の人びとと社会、そして文化について語ることができるでしょうか。かけがえのない作業に携わっているとよく感じます。

私はまた、息の長い地味な資料整理をする一方で、ホームページの更新作業にもかかわっています。財団では、記念館に来て、友の会活動等にも参加していた

だけるよう、ホームページによる広報活動にも力を入れています。記念館のホームページには、1日で平均1000件近いアクセスがあり、この仮想入館者を来館につなげていきたいと考えています。更新すると、その日からアクセスがあるので、励みになっています。

今年の4月から、事業に関心をもつ学芸員が加わり、広報活動の拡充は勿論、博物資料や画像に比べて比較的時間と専用の機械を使う音声と動画についても、データベース化に取り組むことが出来るようになってきました。私にはいままでの作業を継続することの他にもやってみたいこともあります。事務スタッフやボランティアあつての学芸という立場を忘れず、それらを実行していきたいと考えています。

今日も、記念館には書棚におさまった本が天井まで広がり、ステンドグラスからやわらかい日射しがこぼれています。春夏秋冬、本に囲まれて、さまざまなことを感じられる司馬遼太郎記念館へどうぞ。

◆司馬遼太郎記念館データ◆

住 所 大阪府東大阪市下小阪

電 話 06-6726-3860

ホームページ <http://www.shibazaidan.or.jp>

新幹線からは新大阪駅下車、地下鉄に乗り換え難波駅で下車。近鉄線（東生駒、西大寺行き各駅停車）に乗り換えて9つ目にある八戸ノ里（やえのさと）駅が最寄り駅。駅に記念館までの道のりを標した地図をおいています。下車徒歩約8分。

- ・司馬遼太郎の自宅、庭と建築家・安藤忠雄氏設計の記念館からなる。私立博物館。
- ・記念館のメインは、地下1階から地上2階まで3層吹き抜け（高さ11メートル）の大書架。30cm四方の書棚はの数は3400。書斎、玄関、応接間、廊下、書庫にある蔵書をイメージ展示。
- ・ホール側に、司馬遼太郎が著した文庫本と単行本（初版）を配置し、向かいにて企画展を展開。
- ・ホール（150余席）では、講演会、音楽会等を行う。通常は企画展に関する映像を定期上映。

ヤドリバエとの出会い

一 木 良 子
(国際社会文化専攻)

「一木さん、ヤドリバエも面白いですよ。とりあえず、やってみませんか？」

1998年の春、比較社会文化研究科の修士課程に入学し、生物体系学教室の一員になったものの、何をやっていいかもわからずにボーっとしている私に向かって、寫先生はそう言ったのだった。私は「うそ！？ハエってあの犬の糞とか生ゴミとかにブンブン集ってるやつだね。冗談？」と心の中で叫んだ。しかし、にこやかな笑顔とは対照的な寫先生のドスのきいた声には、恐くて逆らうことができなかった。こうして私は、渋々、ヤドリバエという得体の知れない昆虫の研究をスタートさせることにした。

ヤドリバエってかわいい！

最初に、寫先生は私を、大学の近くの南公園に連れて行った。そして、半径50cmはあろうかという巨大な虫網で次々とハエを採っては、これはニクバエだとか、イエバエだとか、クロバエだとか教えてくれた。しかし、どんなに目をこらしても、私にはそれらがどれも汚らしいブンブンバエにしか見えなかった。先生はそんなブンブンバエの中からいくつかを摘み出して、この眼が離れていて翅が大きく広がっているのがヤドリバエだよと言った。

それからの私は、くる日もくる日もハエを採っては、自分が絶対ヤドリバエだと確信するハエを寫先生に見せ、玉砕するということをくり返した。悲しいほどに、私が採ったハエがヤドリバエであることはなかった。中でも一番くやしい思いをしたのはセンチニクバエを採ってしまったときだ。このハエは眼が赤く離れている上に、時々翅を広げて止まるため、当時の私は頻繁にこのハエを採っては、ヤドリバエだと思い込んだ。

そんな日々がどれくらい続いたのだろうか、そのうちに私は少しずつではあるが、ヤドリバエの特徴がわかるようになっていった。ヤドリバエは訪花性であるため汚いものには寄り付かないこと。花の中でもセリ科の花や、白くて小さめのつんとした匂いを放つ樹木性の花が好きだということ。ハエはハチとは違って、飛んでは止まり飛んでは止まりという行動をくり返す傾向があり、ヤドリバエはその間隔が他のハエよりもや

や短いこと。そこまでするとヤドリバエを採ることがどんどん楽しくなってきた。オレンジ色で大きなやつはセスジハリバエ、灰色で大きなやつはカイコノウジバエ、黒くてお腹が光っているやつはカイコノクロウジバエ。何種かのヤドリバエについては、種がわかるようにもなった。

ある程度ヤドリバエがわかるようになった私は、次に、ヤドリバエを飼ってみることにした。シャーレの中に角砂糖と水で湿らせた脱脂綿を入れ、ヤドリバエを入れてみる。すると、ヤドリバエは前脚を左右に小刻みに動かしながら角砂糖の方へ近寄っていき、角砂糖の前まですると口吻を伸ばして何度も角度を変えながら表面をなめはじめた。そして、お腹がいっぱいになると、クルッと一回転して半透明の液体を排せつした後、前脚や後脚を使って口吻やお腹の先端を擦り、丹念に手入れをくり返した。かわいい！ 私にはヤドリバエのこの一連の行動がとても愛らしく感じられた。ヤドリバエの世界に完全にはまった瞬間だった。

失敗と発見

ヤドリバエは捕食寄生性という変わった生活を行う。捕食寄生性というとなにやら難しく聞こえるけれども、幼虫の間を他の昆虫に寄生してその寄主となる昆虫の体を食べながら成長し（寄生される昆虫のことを寄主という）、十分に大きくなったらその寄主を殺して外で蛹になる、という生活のことである。私はわくわくしながら、ケージの中にヤドリバエの雌と寄主となる蛾の幼虫を入れてみた。しかし、いくら待ってもヤドリバエは卵を産まない。そのうちに観察することに飽きた私は、お茶を飲みにもその場を離れてしまった。それから数週間後、シャーレに入れて飼っていた蛾の幼虫は小さな蛹になった。「栄養が足りなかったのかな？」と思いながらもたいして気にも止めず、それからまた数日が過ぎた。そしてある日、私は信じられない光景を目にした。シャーレの中にハエがいるのだ！頭がパニックになった。「どうして蛾の蛹からハエが羽化したの！？」ハエの入ったシャーレを手にししばらくじっと考えた。そう、私が蛾の蛹だと思っていたものは、実はヤドリバエの蛹だったのだ。恥ずかしい

ことに私は、蛾とハエでは蛹の形態が全く異なるにも関わらず、その違いに気がつかなかったのだ。このような失敗をいくつも経て、私はヤドリバエについての知識を少しずつ増やしていった。英語の文献を読むのはどうしても苦手だったが、ヤドリバエを採ったり飼育したり観察するのはとても楽しかった。

修士課程に入学して1年以上が過ぎた頃、私はあいかかわらず野外に行ってヤドリバエを採っては、室内に持ち帰り飼育するという日々をくり返していた。私の研究は、自分では一応“生態学”という分野に入っているつもりだったが、実験計画もろくに立てず、思い付いたことをやみくもに行っているだけの私の作業は、とても研究とよべるものではなかった。

そんなある日、野外でたまたま採ったノコギリハリバエというヤドリバエをカイコに寄生させ、解剖してみることにした。ひとつ、またひとつと解剖してみても、カイコの体の中にいるはずのヤドリバエの幼虫は見つからない。外も暗くなり、そろそろ帰ろうかなと思いつながらも、バスの時刻まであと十数分、もう1匹だけ解剖することにした。冷凍庫から仮死状態のカイコを取り出し、顕微鏡をのぞきながら解剖バサミで白い表皮をチョキチョキと切っていく。八方に開いた表皮をピンで止め、体腔にある白いぶよぶよした脂肪をピンセットで丁寧に取り除く。しかし、どんなに視界をすっきりさせても、ハエの幼虫は見つからなかった。「もうやめよう」と思った時、カイコの消化管の一部が赤く変色しているのが目に入った。顕微鏡の目盛りをまわしその部分を拡大してみると、赤く変色した部分に、カイコの気管が突き刺さっているのがわかった。通常、カイコの消化管はクリーム色であり、その表面を気管が木の根のように網目状に走っている。間違っても、気管が消化管に刺さるようなことはないはずだ。鼓動が高鳴るのを感じながら、私はピンセットの先で消化管をそっと破った。すると、気管が刺さった場所の内側に、腹部の先端をぴたりとくっつけているハエの幼虫の姿があった。これが、消化管に寄生し、カイコの気管を横取りして呼吸するというこれまでに例のないヤドリバエの発見だった。

博士への道

後半にラストスパートをかけ、必死の思いでやっと修士論文を書き終えた私に待ち構えていたのは、博士課程へ進学するか否かの選択だった。就職活動にことごとく破れ臆病になっていた私は、逃げるように博士課程へ進学する道を選んだ。しかし、進学の動機はど



博士論文の研究材料であった
ムラヒゲナガハリバエ

うであれ、博士課程に進む以上は、これまでのような中途半端な気持ちで研究に取り組むべきでないことは分かっていたつもりだ。それからの私は、野外にハエを採りに行くことを極力避け、実験室内で実験

をくり返し行い、こつこつとデータを取っていくことに専念した。その時自分に一番欠けているものは、地道に長い月日をかけてデータを取るだけの根気とやる気だと思ったからだ。とにかく1年間はがんばってみようと思った。それができなければ博士論文を書かなくて到底無理だと自分に言い聞かせた。

博士課程の1年目、私は休みの日も盆も正月もとにかく毎日大学に行き、虫の世話とデータ収集を続けた。生態学に必要な統計の勉強も必死でやった。そして、1年間やり遂げた時、私は心から「もっとヤドリバエの研究がやりたい」と思った。今思えば、その時が私の研究者としてのスタートだった気がする。

そして、それから2年後、私は博士号を取得した。振り返るとあっという間の5年間だった。寫先生の最初の一言がなければ今の私はなかつたらう（あとから思えばあのドスの効いた声は先生の地声だったのだが）。寫先生は気分屋の私を、いつも温かく見守り、励まし、根気よく指導してくださった。初めて英語で論文を書いて持っていったときも、私のひどい英文をひとつひとつ丁寧に直した上で、論文としてどこがおかしいのか、どう直すべきなのかを時間をかけて説明してくださった。今の私があるのは寫先生のおかげだ。また、私が博士論文を書くにあたって、生態学の専門的な立場から厳しい指導をしてくださった九州大学大学院農学研究院の高須先生にもこの場をかりて深くお礼を申し上げたい。さらに、数々の助言と激励をくださった研究室の先生方や院生のみんな、卒業生の先輩方にも心から感謝したい。最後に、娘の好き勝手を許し、大学院にまで進ませてくれた両親にも一言、「ありがとうございます」と言いたい。



学位授与式を終えて一寫先生と

比 文 と 私

フラヴィオ F.C. ダルース
(日本社会文化専攻 M1)



1998年4月6日。私が来日した日であって、私の人生が変わる日でもあった。初めての外国旅行、しかも単なる観光客としてではなく、その日から5年間文化の違う国で留学生として生活する予定だった。とはいえ、私は少しも怖くなかった。むしろ楽しみに

していた。歴史が好きだからか、文化の違う国で生活してみたかった気持ちは強く、家族や友達と離れて暮らす寂しさ、必ず訪れて来るだろう苦労まで押し切って自分の昔からの夢に賭けた。ブラジルを出て、日本との運命的な出会いを果たした。

大学生としての本格的な勉強を始める前に、ある程度日本語を取得しなければならなかったもので、東京外国語大学の留学生日本語教育センターに入学した。日本語を零から覚える難しさと楽しさに直面した私は世界中からの友達に囲まれて頑張ってみた。文法などはもちろん、言語と一緒に獲得しなければならない事柄に関しても面白い体験を沢山した。先生方を呼び捨てにしてみたり（「先生」や「さん」を付け忘れる事）、「ケンカ」と「結婚」、「病院」と「美容院」といった発音の似た言葉を間違えたり、今振り返ると結構笑える話もいっぱいある。特に苦労したのは言うまでもなく読み書きだった。外国人、特に漢字を使わない西洋人が日本語を勉強する時に一番大変なのは読み書きなのである。皆さんは漢字の事しか思いつかないだろうが、それよりも言葉の間にスペースがない事が一番私達を困らせる。なぜかという、どこからどこまでが一つの単語か分からないので、辞書を引く事さえ出来ない。漢字の検索方法も筆数や部首、読み方などを基準にされていて、ある程度知らないと意味を調べられない。話し言葉と書き言葉の違いも大きく、「あ

ったかい」という言葉を必死になって調べたことを思い出す。外国語が好きで日本語を覚えたかったのは事実だが、想像以上に難しかった。幸いにも、私が初めて知り合った日本人達、日本語の先生方が皆素敵な方々ばかりで、日本語、日本人、日本文化への好印象と興味が持てました。いつも年上に見られる私は「日本語を覚えるのに苦労した分だけ老けた」と、今では当時の事を懐かしみながら笑いのネタにしている。

一年間日本語を勉強した後、私は九大に入学した。必修単位とストレスという二つの怪物に追われる日々。そして彼らの目を盗んで友達と楽しく過ごした日々。将来は自分が思い出して一番懐かしいと思うのは、今も続いているこの時代なんじゃないだろうか？言葉と文化の壁、教育制度の違い、決して楽ではなかったが、良い先生と友達に恵まれて何とか無事に卒業の日を迎えられた。来日した5年前のあの日も今も、周りの人々に支えられて来た事には変わりはない。「出会えてよかったね」、「お世話になりました」を心の底から言える相手がいて、私はなんて幸せだろう。進学先を決める時、私が卒論のテーマに選んだ満州を研究なさっている先生が比文にいらっしゃると聞いて決意した。

進学してまだ半年しか経ってないが、ここへ進学して本当に良かったと思っている。比文は自分の研究はもちろん、そしてその枠を超えた視点で人間を考えるきっかけを常に作ってくれる画期的な学府だといっても過言ではない。演習を中心に議論の場がしっかり設けられていて、学生達がお互いに刺激しアドバイスし合って、そのやりとりがスムーズに進められるよう先生方はしっかりと指導して下さい。生徒の約半分が留学生で、各テーマについてその文化的背景の違いが色濃くかつ面白い形で現われることも珍しくない。発言を通じて皆が自分の個性を表現出来る環境が整っていて、お喋りな私だから逆に喋り過ぎないように常に注意をはらっている。

これから私は忙しくなるだろうが、我々の比文が今のように楽しく勉強が出来る所であり続けることを期待している。皆さんも学生生活を楽しんではいかがでしょうか？

長期海外留学者一覧

2003年11月1日現在

課程学年	専攻	ふりがな 名前	留 学 先		期 間	渡 航 目 的 等
			国 名	大学名等		
修士1年	日本社会文化	そん 延 孫 延	中 国	香港大学	2003年9月 ↓ 2004年3月	九州大学交換留学制度により、中国の方言と日本語の比較研究を行う
修士2年	国際社会文化	まつの さゆり 松野 小百合	フランス	ストラスブルグ大学	2003年4月 ↓ 2004年9月	ルノー財団奨学金による留学プログラムに参加
博士1年	日本社会文化	と 昱 杜 昱	中 国	日本語大学	2003年4月 ↓ 2004年3月	日本語教育実習のため日本語学校で日本語を教える
博士1年	国際社会文化	さとう けいし 佐藤 圭史	リトアニア	ヴァリユニス大学	2003年10月 ↓ 2004年9月	博士論文作成に必要な資料収集とリトアニア語習得
博士2年	日本社会文化	ほりお けい 堀尾 佳以	韓 国	永進専門大学校	2003年4月 ↓ 2004年3月	日本語教師として日本語を教える
博士2年	国際社会文化	あかた さえこ 阿形 佐恵子	韓 国	延世大学	2003年4月 ↓ 2004年3月	韓国キリスト教史研究及び語学研修
博士2年	国際社会文化	はやし かずひろ 林 和宏	メキシコ	メトロポリタン自治大学	2002年10月 ↓ 2004年9月	日墨学生交流プログラムによりメトロポリタン自治大学に留学
博士2年	国際社会文化	ふくなが みか 福永 美佳	中 国	北京師範大学	2003年10月 ↓ 2004年9月	中国文学・戯曲研究のための調査・資料収集
博士2年	国際社会文化	まつお はるか 松尾 春香	フランス	パリ第4大学 (ソルボンヌ大学)	2003年10月 ↓ 2004年9月	カストールの絵本シリーズ及びその時代について研究
博士3年	日本社会文化	はしの しんべい 端野 晋平	韓 国	東国大学校	2003年10月 ↓ 2004年9月	博士論文執筆のための調査・資料収集
博士3年	国際社会文化	こまつ よしたか 小松 義隆	イギリス	グラスゴー大学	2003年4月 ↓ 2004年3月	18世紀英語研究並びに資料調査
博士3年	日本社会文化	いしかわ ともこ 石川 朋子	韓 国	釜山大学校	2002年10月 ↓ 2004年9月	釜山大学校人文学部日語日文学科の客員教授として赴任
博士3年	国際社会文化	えぐち ふゆこ 江口 布由子	オーストリア	グラーツ大学	2003年6月 ↓ 2004年9月	オーストリア＝ハンガリー史研究のため
博士3年	国際社会文化	しまむら なおこ 島村 奈生子	メキシコ	メキシコシティ	2002年10月 ↓ 2004年3月	メキシコシティ中心街の観光開発と再居住化計画についての文化人類学的調査
博士3年	国際社会文化	おくだ ともし 奥田 知志	ドイツ	レーテル大学	2003年4月 ↓ 2004年3月	博士論文執筆のための資料収集

平成15年度「学会報告」支援事業一覧

番号	申請者				学会に関する事項			
	学年	専攻	名前	世話人教官	学会の名称	発表題目	開催期間	開催地
1	修2	国際	ハヤシ タツヤ 林 辰弥	酒井 治孝	地球惑星科学関連学会 2003年合同大会	珪藻化石群集の分析による古カトマンズ湖の第四紀環境変動の研究	15/5/26～ 15/5/29	千葉市
2	博2	日本	ヤマシタ シズカ 山下 静香	花田 俊典	2003年度日本近代文学会 九州支部春季大会	「遠藤周作」の審級	15/6/21～ 15/6/22	長崎市
3	博1	日本	タマガワ ヒロアキ 玉川 博章	杉山あかし	日本マンガ学会第3回 大会	マンガから小説へーヤングアダルト文庫における変化ー	15/6/21～ 15/6/22	京都市
4	博1	日本	コウ ユイテツ 黄 英哲	松村 端子	2003年度日本語教育学会 春季大会	インタビュー会話に見られる日本語母語話者の応答伝達技術ー「不同調」の表現と管理をめぐってー	15/5/24～ 15/5/25	東京都
5	博2	国際	カミクリ シンイチ 上栗 伸一	西 弘嗣	日本古生物学会2003年 年会・総会	斬新世／中新世境界における放散虫群集解析 (Leg199)	15/6/27～ 15/6/29	静岡市
6	修2	日本	イケウチ カズキ 池内 一樹	杉山あかし	カルチュラルタイフーン 2003	フリーター、その社会的位置	15/6/28～ 15/6/29	東京都
7	博1	国際	オウ キョウギョク 王 京	合山 究	平成15年度(第51回) 九州中国学会	五山文学における酔杜甫像ー題酔杜甫像図詩をめぐってー	15/5/10～ 15/5/11	熊本市
8	博2	日本	リン ソミ 林 素味	有馬 学	2003年度第8回東アジア 近代史学会	日本の台湾統治前期における貧民救助の特質ー貧民救済施設を中心にー	15/6/28～ 15/6/29	東京都
9	博3	日本	シャ シンペイ 謝 新平	井上奈良彦	国語学会 2003年度春季大会	状況「ヲ」格の他動性についてー中国語訳との対象からー	15/5/17～ 15/5/18	堺市
10	博3	国際	ボク シュンレイ 朴 春麗	合山 究	日本中国学会第五十五 回大会	「明清楽」の源流をめぐって	15/10/4～ 15/10/5	つくば市
11	博3	日本	ミタニ ナホ 三谷 奈保	小池 裕子	第9回日本野生動物 医学会	ツシマヤマネコのフンから採取した毛を用いた窒素・炭素安定同位体による食性分析	15/6/26～ 15/6/29	沖縄県 西原町
12	博1	国際	リ チミン 李 智旻	杉山あかし	カルチュラル・タイフーン 2003	フリーター、その社会的位置	15/6/28～ 15/6/29	東京都
13	修2	国際	マンブク マミ 萬福 真美	酒井 治孝	日本有機地球化学会	古カトマンズ湖堆積物における過去4万年間の有機炭素濃度・炭素同位体組成の変動	15/8/3～ 15/8/5	札幌市
14	博1	日本	ユウ エンレイ 姚 艶玲	板橋 義三	2003年度日本語教育 学会秋季大会	日本語のヲ格名詞句を伴う自動詞構文の成立条件	15/10/11～ 15/10/12	吹田市
15	博2	国際	マツナガ ケイコ 松永 恵子	合山 究	第14回書学書道史学会	「飛白書」における思想的背景	15/10/10～ 15/10/12	札幌市
16	博2	国際	フクナガ ミカ 福永 美佳	日下みどり	中国古典小説研究会 2003年度大会	元雑劇における庶民の恋ー「詐子調風月」を題材としてー	15/8/27～ 15/8/29	静岡県東 伊豆町
17	博3	日本	ライシュウワン	松村 端子	第12回社会言語科学会	シンガポールでの日本語教室における異文化コミュニケーションー教師像とコミュニケーションギャップとの関係ー	15/10/4～ 15/10/5	吹田市
18	博2	日本	コウ シエイ 黄 士瑩	松村 端子	第12回社会言語科学会	意見衝突の場面における日本人と台湾人の行動パターンの対照研究ーその対処法を中心にー	15/10/4～ 15/10/5	吹田市
19	修1	日本	ヤタベ アキコ 谷田部明子	小池 裕子	日本哺乳類学会 2003年度大会	オウギハクジラ筋肉のアイソトープ分析	15/9/20～ 15/9/23	盛岡市
20	博2	日本	チャ サンリョン 車 相龍	宮川 泰夫	東北地理学会・北海道地理学会 2003年度秋季学術大会	創造的地域革新体系と地域産業景観の変化	15/9/27～ 15/9/29	旭川市

番号	申請者				学会に関する事項			
	学年	専攻	名前	世話人教官	学会の名称	発表題目	開催期間	開催地
21	博1	国際	シンジョウ ミチヒコ 新城 道彦	松原 孝俊	平成15年度第54回 朝鮮学会	急迫する日韓併合の「正当」化と抽象化―条約調印とその公布の隙にみる日韓併合―	15/10/4～ 15/10/5	天理市
22	博3	国際	ヨネダ サチヨ 米田 幸代	松原 孝俊	平成15年度第54回 朝鮮学会	現代朝鮮語・他動詞の語彙・形態論的な分類の試み―他動詞の語彙的な意味とうけみ形との関係にもとづく分析―	15/10/4～ 15/10/5	天理市
23	修2	日本	シツ カスホ 實 一穂	宮川 泰夫	東北地理学会・北海道地理学会 2003年度秋季学術大会	日本の地政学の登場と発展―ハウスホーファーのゲオポリティークをめくって―	15/9/27～ 15/9/29	旭川市
24	博3	日本	ラ サイリツ 羅 済立	板橋 義三	日本中国語学会第53回 全国大会	客家語と鎌倉宋音の止撰字について	15/10/25～ 15/10/26	東京都
25	博3	国際	ニシノ ゲン 西野 玄	松原 孝俊	平成15年度第54回 朝鮮学会	堤灯行列と日韓併合―桂内閣と「併合祝賀」―	15/10/4～ 15/10/5	天理市
26	博1	日本	オオシマ ヤスヒロ 大島 康宏	矢田 脩	日本昆虫学会第63回 大会	ミスジチョウ亜族Neptinaの分類学的再検討	15/10/11～ 15/10/13	厚木市
27	博3	国際	ミヤタ ナオコ 宮下 尚子	岩佐 昌璋	日本中国語学会第53回 全国大会	現代漢語の動詞派生接尾辞“一化”	15/10/25～ 15/10/26	東京都
28	博2	日本	ミハラ ショウゾウ 三原 正三	小池 裕子	18th International Radiocarbon Conference	AMS 14C dating using black pottery and fiber pottery	15/9/1～ 15/9/5	ニュージーランド
29	博3	日本	クレシマ ムト 庫熱西馬木堤	小池 裕子	日本人類学会 第57回 伊達大会	JCVウイルスとミトコンドリアDNAからみたウイグル族の遺伝学的系統について	15/10/3～ 15/10/5	伊達市
30	修2	国際	ナカノ ミカ 中野 美香	W.ミヒエル	日本コミュニケーション学会 九州支部第10回記念大会	異文化間教育としてのParliamentary Debateの意義―討論教育の課題と展望	15/10/12	熊本市
31	博3	日本	マユダ ヨシヒロ 前田 善弘	福留 久大	日本交通学会2003年 第62回研究報告会	規制緩和後の乗合バス・サービスの変容―福岡県・西鉄を中心に―	15/10/18～ 15/10/19	広島市
32	修2	日本	イトウ カズヒロ 伊東 和博	山下 潤	The 2nd International Joint Seminar between Chungnam Natinal University and Kyusyu University	The State of rainfall disaster management in Japan	15/10/30	韓国
33	修2	日本	テラハラ ユウスケ 寺原 裕介	山下 潤	The 2nd International Joint Seminar between Chungnam Natinal University and Kyusyu University	The Kyusyu shinkansen before commencement of business	15/10/30	韓国
34	博3	日本	ノグチ トモタカ 野口 朋隆	高野 信治	2003年度広島史学 研究会	佐賀鍋島家における祖先像と歴史書の編纂	15/10/26	東広島市
35	博3	日本	イ ナリ 李 在錫	花田 俊典	2003年度日本近代文学会 九州支部秋季大会	日本近代文学における「無能」「無能者」言説	15/11/15～ 15/11/16	熊本市
36	博3	日本	イトウ カヨ 伊藤 佳世	外川 健一	The 15th International Symposium The Secretariat of the PRSCO of the RSAI on Regional Sci.	A Case Study of Minamata City	15/11/1～ 15/11/3	沖縄県西原町
37	博1	日本	オウ ケン 王 娟	板橋 義三	中国四国教育学会 第55回大会	日本語の接尾辞「的」について	15/11/8～ 15/11/9	東広島市
38	博1	国際	キョク シンキョウ 曲 志強	板橋 義三	中国四国教育学会 第55回大会	日中日常あいさつ表現対照研究	15/11/8～ 15/11/9	東広島市
39	博3	日本	ヨウ ケイビン 楊 慶敏	萩野 喜弘	九州経済大学第53回 大会	中国の石炭価格政策の変遷	15/12/6	大分市